千載倭歌集　下　十二

太政官文庫

和書門 類	七六一四 號	一一九 函	四 架	五四 冊

内閣文庫

和書 類	七六一四 號	五四 冊	二 架	二〇〇 函

内閣文庫

番號	和	7614
冊數	54	(10)
函號	200	4

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

古巛氏藏

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
圖書局文庫
[illegible]文庫
[illegible]氏藏

千載和歌集巻第十一

恋歌一

堀河院御時百首歌たてまつりける時
初恋の心をよめる　源俊頼朝臣

難波江の藻にうづもるゝ玉柏あらはれてだに人をこひばや

二条太皇太后宮肥後

ゆるしなき人をこひしてこひわたるかなおもひのほかにこゝろさへよ

前斎宮河内

ひとしれぬやまふかの[illegible]にしのびてもえぜぬ[illegible]

権中納言俊忠中将に侍りける時歌合し侍りける

初恋の心をよめる　後二条関白家筑前

おもひわびいはでのもりの袂かなみぬ恋をのみ人しらずとも

藤原基俊朝臣

ひとしれずみのうちにのみもえわたるかな[illegible]

題しらず　輔仁親王

しられじなおもひもしらぬ人をのみこひわたるかな

法性寺入道前関白家にて

中院右大臣

いかにしてよるのおもひのたえまなくゆめにも人をみるよしもがな

清くめ心てあひぬまひに成ぬ老こそよかくる世の憂き

百首の哥奉りける時恋の哥とてよめる

大炊御門右大臣

おもひかね恋は頼人のよきそみなく世のつねのたのみかなおもふらん

左京大夫顕輔

おりしもあれそではよその待ころやてゝよし花は聞本

る袖かな人の松に吹風の音にのみやはきゝわたるべき

待賢門院堀河

わが袖の岩よくてこそ浪にぬれつゝ人によからくなかな

上西門院兵衛

君か世にとをしらひくとしてまかゐねかてときみかん

権中納言俊忠家の哥合によめる

藤原基俊

みちとせにかよふくものあふ風あまたかふるものも世のあ

人はつらしな　藤原長能

なとふ雪て岩にはせきしまつに心あるらじこゝ

うらみの人をかなしみてこそ命の

物のきをしるとてかしわかきにはなわ

事をぬさよんなようつらしくるぞ

前大納言公任

杉川はかうら浪風濤乃今はやわつと見え[illegible]
あ乃かゝ月恋の[illegible]

堀川右大臣

人の[illegible]物おもふ時の袖みえ[illegible]
権中納言[illegible]家にて[illegible]
恋の心を読侍ける

源俊頼朝臣

思ひわびて[illegible]物を思ふ[illegible]若野の露[illegible]
恋の歌とてよめる

源明賢朝臣

難波[illegible]世をあつめ[illegible]
百首の歌奉りける時恋の歌とてよみ侍
ける

右大臣

今はただ[illegible]の下の[illegible]
しらずや

大炊御門大臣

恋しつゝ[illegible]侍りける[illegible]

従三位頼政

たとへ[illegible]の歌

寂蓮法師

みなかみの[illegible]

藤原清輔朝臣

かゝらぬ風ともなく吹(?)こえてこのまよりもれくる月のかげ
歌合し侍りける時恋の心をよめる

刑部卿頼輔

恋しなむ世のはかなさにいひ(ゆくイ)ても命あらばと今ぞ惜(セイ)しき

顕昭法師

今は猶清瀧の川のみなかみやつもりてかはの音ぞ下れる
しらず

讀人しらず

侍りしをしのびてまかりける人のけしきをかくしけることのさ
恋乃百首歌よみ侍りける時寄霧恋といふ心を

とよめる

賀茂重保

つれもなき人の心やあふ坂の関路へだつる霧なからなむ
恋歌とて讀侍る

藤原清輔朝臣

波間よりみえしはかなき島とも(ところイ)見えずなりぬる人の心は
二条院乃御時に恋の心をよめる百首の歌たてまつりける時

源乃みちちかの朝臣

我恋はまたかくれぬにたもとには猶しのびかね身はいかにせむ
横川の峰にこもりける時

仁昭法師

あまたたびこえて侍りしに人の心もかはりける

世の中をとよもおもひし身なれともなやはけく人ぞこひしかりける
題しらず　花園左大臣
あはれなりおなじ野山にたてる木もかゝるしるしの契ありけり
大宮前太政大臣
みをかくし山よりいでゝ君が世にあはんと月のこよひやめぐらん
帥中納言伊房
君こふるなみだにぬれて月日をもおもはでくらす
きさかたの夕まぐれしのびてわたる海人のとま
川ときさかせ浪にくゆるたまもかる
二条院讃岐

あはれ哉よにひそめぬるもの哉松吹風にあはぬ夢かな
百首乃哥よみ侍りける時恋の哥
式子内親王
はかなしや枕定めぬうき旅ねよか乃ふゆ夢かよひち
百首哥よみ侍りける時恋乃心をよめる
右のおほいまうちきみ
ことのはの川淵瀬にあらんよりは今のおもひをしるよしもがな
題しらず
刑部卿頼輔
みつくきのあとをやこゝろとめてみむ世をうらむらん
源兼房

ちるはなやあらしにつもる浪にはゝ神代のはるもかくとしりせは
源師光
恋しさは我あはれかたわるゝはしらまてわすれしきるらむ
藤原惟規
きのめとやつまとやいつれ梅かゝをとめつゝしらむうくひすそなく
賢智法師
かくらわかみちしまれとおもへともえぬ梅の物よりたえぬきさ
夏よりわか恋すへはゝるさへそしのふこそ後もよる
賀茂重保
人しれはおりふしかはゝ梅のこ草花開てしよりつゝそまれ

野しら浪
津守国光
思とも霞つゝ春はさくら思ひにはわすれのかとなるらむ
大中臣清文
おつまさたる森よるまてまちぬ玉のハ恋風のかゝの鳥のこゑもつくすゆゑ
源季貞
今しははおもひそめてしなしよりかまゝは涙の色とかわるなれ
祐盛法師
色みえぬ恋の枕をきてしもたゝなにしとそしらす涙なわるそ
大中臣定雅
更床は思ふに乃奥風に寄きそ家浪もとしきし恋のふさ

春ごとの涙時雨と降ぬれはきゝのかた山に色付にけり

祝部宿禰成仲

いかにせむかたの山の下紅葉時雨につゝいろこのまさるらむ

二条院前皇后宮常陸

涙にも袖に時雨の風さえてそのかほりぬる色のうつしめる袂は

賀茂重延

摂政右大臣の時乃百首の哥よみ侍る恋の心を

詠侍ける

従三位頼政

うき涙しやおさゆる袖の下くゝる涙の末と人やとかめん

皇嘉門院別当

思ひ余袂は色に出にけり涙よりしもなかれての涙のかた

とにかくにうき君ゆへつらしとて恨みても猶わすれかねて

涙こそしるらめ

左兵衛督隆房

恋わひてかへる涙の[illegible]さへ袖をも[illegible]かはかさし

よみ人しらず

[illegible]

人目をもつゝむ思ひは[illegible]袖にあまれる涙なりけり

大納言宗家

[illegible]

右京大夫季能

法眼実快

ち越人へそこぬるかな君はいとゝたのもしや神の宮にそ

藤原伊綱

院建春門院かくれさせ給ひて後衣服しつらひたりけるを見侍りけるに

摂政右大臣の時家の哥合に述懐の心を

よめる

藤原季経朝臣

思ひいてもなき身となりてあはれにもおもはてしのふ人ハ

右大臣家にて百首哥よませ侍りける時述懐の心を

よみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

さりともと思ひし人は衣にや露やへたてゝ袖のぬるらん

いつまてしのふ宮木の庵にすゝしく常とみるらん

志乃ふることこそ

悲しみのなをわすれ給へて見る人

千載和歌集巻第十二

恋哥二

堀川院の御時百首の哥たてまつりける時恋の
こゝろをよみ侍りける　　大納言公実

おもひわひ今はところやいもせ川しからみもなき袖のふちせを

題しらす　　花園左大臣

こゝろからくるしき身をもなかめつゝひかすわれ風なみにゆへにおもふへしやは袖

二条太皇太后宮大弐

恋そめし人はかゝらてつらからて我涙しもなとつらからん

白河院三条内裏におはしましける時あめのこゝろを

恋の哥よみ侍りけるによめる

前中納言雅兼

かはかりの涙にもえぬわか恋をしのはて袖にまかせつる哉

権中納言俊忠家に恋の十首哥よみ侍りける時
いのれともあはさる恋といへる心を

源俊頼朝臣

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとはいのらぬものを

おなし十首の中にかたき恋といへる心を

修理大夫顕季

うれしくは後の心を神もきけひくしめなはのたえぬ思ひを

物かはりたる恋　藤原仲実朝臣

猶ハたゝ梅の風にも花薄まてやこひしき人の忘れかたみに

さきたつ涙の恋　権中納言俊忠

こひしくもかくもおもはしおほ川浪をせきてやとめし心なりけり

女にかはりてよめる　徳大寺左大臣

いかで我人よりさきにうき身をもしらせてよはになりもせむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家

歌合し侍りけるに恋の心をよめる

源雅光

玉かつら野への露のやとりにもかさねて袖をしほる物かは

藤原公基

あふことも我そこひしき恋しさのつもりてやみる人はうれしき

中院入道右大臣中将に侍りける時歌合し侍

りけるに恋の歌とてよめる

藤原道経

恋ひ涙の川よりそたちまさるらむ世の中とこそ世にはなけれ

百首歌よませ侍りける時恋の歌とてよめる

前参議親隆

あふことの有ける身をもしらすしてすみかへかねつ人やいかなる

逢日隔恋といへる心をよめる

院御製

悪億ふきたる洞よりおれしきたる今の神はぬまもりまもおもしらす

右のおほいまうち君

翔なく見ぬる露と共に明くれはめくる磯の袖にかくはぬれまし

権大納言実国

春はなにとて花を見たまへや秋はむしろはえなきをなからしともか

権大納言実家

こうさえは道と見つるに駒むしき命のかうはくも苦しきみ

右京大夫頼家

ゆくへわかれ行ふと思ひてつかれわかれ涙乃色をみせとや

俊恵法師

恋しきものは命をゆつれと現くつまさへ命乃かきれ頼しき

従三位頼政

むかしの女の浪乃川のなやきもせよ我かわかれぬるを見るまに

藤原顕方

我恋は人をまたひとまかりぞかへりぬしやましき名の風の寄

道因法師

あはれはなき恋しき別乃名かれに命をうしなひあはれかきと思ひかは

賀茂重保

綿を夜乃ふかきよりおもひ世は秋にわかれ夜よ思ひ出る

百首哥たてまつりける時恋の哥とてよみ侍ける
前参議教長
いのちわ恋路にさきたつ物ならはおしからぬ世[illegible]
とてもかくも物やおもふる人によ[illegible]
恋のつきせぬ心をよめる　三のみこの家の越後
ほのかにも[illegible]
大納言[illegible]みちかねたる時右にこと
侍るにとハ[illegible]
ありて[illegible]
法性寺入道前太政大臣

わひぬれバ[illegible]
後三条内大臣家にて哥合し侍りける時恋の
哥とてよめる　道因法師
あふ事[illegible]
贈左大臣長実八条の家にて恋の心をよませ侍ける
左京大夫顕輔
[illegible]
平忠盛朝臣
[illegible]
藤原道経

恋侘ぬちぬのますらおならなくに生田乃川に身をやなけまし

寂超法師

命をハあたにあらしと思ひしを恋志ぬへくもよにせてしかな

源師光

恋こしも涙しとも思ひきや年のつもるを人にきかれん

道因法師

あふ事ハ夢かとさめ寐の涙をつたへても思ひ人にしられん

叡照法師

深き思ひ小とた思ひたえすまよ逢世のうき契なりけり

源賢法師

うたゝ寐乃夢に逢みて後よりハ人もたのめぬ暮そまたるゝ

相恵法師

わかれての枕とわかれおもかけの涙にてさめぬ寝覚そする

逢恋乃心をよみ侍ける

二条院内侍参河

床のうへにおつる涙のたまさかくもよすからに人まつ夜はしうらみと

殷富門院大輔

猶なかしと思ふまてこそ嘆かれぬ身におもひけるあはれ命は

右大臣に侍ける時家に歌合し侍ける時恋の心をよみ侍ける

摂政前右大臣

何との色よく分かるれとやおもひみぬさきよ恋わうらん

寄稿恋といへる心を読る　左衛門督家通

わすらはさわこそともの思ふ袖梅しなれとの露を霜て
恋のめくくれはまたありもふかくしけるかな
侍らし苗ら　二条院讃岐

ちやかくさし苦しき袖そ我袖てとおもはましかは
百首の歌の中に恋の心を
式子内親王

袖の色は人のとふまてなりもせよ深き思ひを君したのまは

摂政家秋恋といへる心を読侍ける
左近中将良経

悔行し探ぬよし冴えしく小さきかりもくれの空の雲
恋の旅とそよる　藤原家経
恋とのゝ村雨のうきの浮雲はしとわともへ迄袖ぬらさねは

忍侍書恋といへる心をよみける
藤原家実

磯のくれの浪よもやは千鳥かなしく涙の浪の下や岩
契りしは　藤原家隆
書なし探るく難波の浦や鳴くおもし思ふくらぬ雁の空

読人しらす

契をくことの葉にさへかはる世にあはれなるを
たのみても有しわかれそ人のあはれなる
とかくのうきみをくるしかるらむひとつになるる
人の思ふ事にまかせぬ世はさかな

殷富門院大輔

浦捨てしあくかれ行は雲をとめて月都ひとりそ
恋ぬとも世にふといふなとまらす

藤原家基

おもやらて恋路に海をわたり世をいとふてあまとなる

はかなくも雲にとゝめといふらんともあら

西住法師

我のうへにかゝる朝程のきえぬとはかなきものか
数しられ

従三位頼政

秋神の手のみちひる浦ならは消えぬおもひとはかは

法印静賢

おもふる神のひる月にかやとしてわか身のおもひや

俊恵法師

なけくさや夢とも世の契そむかれぬと頼くつらさ

藤原隆信朝臣

戀しき人の涙こそをとゝ残しみえわかれなるゝ袖の上の雨

賀茂政平

わか戀は秋のかれ野の花つまとともに人の心や岩木ならむ

源光行

戀わひし涙のそこや涙川梅のかほりとかはらんとすらむ

寄石戀といへる心を　二条院讃岐

わか袖は塩干にみえぬ沖の石の人こそしらねかはく間もなし

題しらす　民部卿成範

つゝめとも歎ハ何の色もなくひとしきと云人あはれとこそは海抽と

大宰大貳重家

戀しなしとも猶まさる涙川わか中せきの水かさまさらん

刑部卿範兼

いとゝしくわかなみた川の瀬をはやみ人しれすこそ流れこそ思へ

権清の前斎宮にて人々よみ侍りける哥合とて戀の哥とて讀侍りける

権中納言通房

なかなかに思ひたえなてあふことの涙はしらぬわか袖の松嶋

戀の哥とてよめる

寂蓮法師

おもひあまり夢かよひちのなくさめにありしよりけに袖そぬれける

俊恵法師

夜もすから物思ふ比は明やらぬ閨のひまさへつれなかりけり

浪によせたりし袖を朝夕に濡らしたりと思ひてよめりとかや

菅原是忠

恋侘て人さらにはかなき人そこゝろかすなき我よそにかつ見しほと

藤原親盛

なにとなく世の中はなれしみも隠れぬらくなのみそ川のあれ

静縁法師

とにかくに渡るまよひをもかゝるやと行えんかはらぬ我とも身なり
むはちきりくなからてこれよりもへ津のくに
かゝり

大江維順かむすめ

恋すれは我はなけきはさもこそにこの中にある思ひはいとけなし

暁風催恋といへる心をよめる

藤原雅家朝臣

世とゝもにつれなき人を恋わふる我袂にそ秋の夕風
知しらす

源師光

恋しさをいつはらぬさきに思ふとも身は数ならぬ人の命の涯
安からぬつらきよる

権大納言実国

恋すれは我袂とて思ひ出るをさとるなんつきせぬなみたとそなる

右衛門督家通

ひとすちに恨みもはてぬ先世にしありけん人はまことかはりける
なりひらの中将のはしのかけるは坂世へまかりてよみける

かやくさ風にしほのつらきをしのふにはしきかな

藤原公衡朝臣

戀しさはねるにもなくさむ物ならはさめてはかなき夢とみえなん

法性寺殿乃家上の哥合に臨期違約戀といふ心をよめる

権中納言通親

いましはし宵ゝなくさめて思ひはてぬる人乃心を

藤原盛方朝臣

枕川乃わさかの淵を渡りつゝ心そ(?)しらぬ身をやまかせん

皇太后宮大夫俊成

おもひきや榻乃はしかきかきつめて百夜もおなしまろねせんとは

千載和歌集巻第十三

戀哥三

題しらす

藤原実方朝臣

契りつゝとも風のまゝ(?)なる人乃ことはさきにかくやとおもひしおもひき

相模

忘られぬひとも出ぬる心からくもりて我なみたならまし

藤原長能

つれもなく成ゆく人の玉札を又思ひ出れは袖そぬれける

涙かはかりなかるゝ袖とあまりて別ゆくらん我はつらきを(?)

ふみ月乃七日乃夜大納言朝光物いひ侍るに

秋立の日にかはさ波より今ひとつひ侍るなれは
よし宗ら　小大君
七夕はかしつと思ふらんあふと秋ふれはかたる君にかたる　秋
ひとゝせの皇太后宮にまいりて侍りけるに
弁のめのとのもとへ海のこしれつあまのすゝりまゐらせ
なる硯を給はせくれけれはかはりにまうけ侍る
宇治前太政大臣
うみやまも尽すあるにひとのことやわか何の心なるらむ
なし
弁乃めのと
あるひとゝせ今の恋なふくまれたなつくさとかしとかれ

堀河院乃御時百首歌奉りける時恋の心を
心ところ鶯　大納言公実
根ぬる根にまて年ふる池のよそにぬなはとよ風のかさはを
中納言師時
恋ひのこゝろは川のよとこまて聞る頃はかなくて年ふるも恋はなれたる
源俊頼朝臣
わすれなはつまの枕とあふのやましたしのゝめのえもはてぬ
きゝもしらぬ
中院乃右大臣中将に侍りける時歌合し侍
修理大夫顕季
世とゝもにおもひなかける恋はなほ我か身の物思ひかな

摂政家の百首よみ侍ける　僧都覚雅

振わけしあなたのこゝろをしれはむかしはなれさらめや

堀川院の御時艶書の歌とて人のおくりける返事によ

させ給ひけるにかはりて女房のよみ侍ける

しきりなる大納言公実ハ康資王の母よりつかはし

そうしぬらむ我文見せしかは御侍より侍らなる

ときもそ見つらむとおもひて侍まれしはら

らし侍る　大納言公実

みかしほのなれゆくまゝにたのまるゝ君ならねは

中将に侍ける時歌合し侍けるに恋の歌

わか恋はあまのかるもにみたれつゝかはく時なき浪の下草

もえ侍りつゝ　権中納言俊忠

法性寺入道内大臣に侍ける時の歌合に

うしなふ恋といへる心をよめる　藤原時昌

なかなかに三輪の杉とそなりにける人のとかめぬ宿のしるしは

法性寺殿にて五月の御供花の時をのこ

ども歌よみ侍けるに契後隠恋といへる心をよみ侍

ける　皇太后宮大夫俊成

たのめこし野辺の道芝夏ふかしいつくなるらんもすの草くき

題しらす　法性寺入道前太政大臣

冬乃日数をいかにかへすらむさむさはかなし
位乃山とかくも宮も名にしおへはいかなる
後の朝はかなさ　院御製

我世をは深きめくみにまかせてもたかき葉なるさき
松かしはゝ時雨のくるしきまての色かはりて侍
なるまゝ人は朝まつかこそあれとさしまとひて
とあはれ藤小はな桜はいはなれもなし
上郎こんなつさは物魚の迷ひ我ともさきつ根のもと
花園左大臣よりつかはしける

待賢門院加賀

かねてより思ひし事そふし柴のこるはかりなる歎きせんとは

百首哥たてまつりける時恋乃心をよめる

前参議教長

恋しさは限なき実しかとさへてまたおもひしらるゝわ

左京大夫顕輔

ともすれはつらきとみゆる人をいかにおもふ袖の色そこはかとなき

待賢門院堀河

おもひわひてはちしらぬ身とそなりにけるけさは物をそ思ひますなる

上西門院兵衛

こゑのまも絶よ心やなくさむとつけしむとくらふるあはせよかん
侍賢門院のあき
聞をそれあれはとくむしの音は袖やかはすとしおもひしれとか
後朝恋乃心を詠る　従三位頼政
人はさあかぬ夜床にとゝめつる我心をは我とまつらむ
思ひあまりまかりて有明の月にそかへる
権中納言通親
逢て後逢かたき恋乃月にわかれしにも出しかとも
摂政右大臣の時家の歌合に旅宿逢恋と
いふことをよめる
皇嘉門院別当
難波江乃あしのかりねの一夜ゆへ身をつくしてや恋わたるへき
初逢恋の心を詠る　藤原忠衡朝臣
恋しさておもひしはれさそとつきさき袖は涙にぬれまさりけり
　藤原隆信朝臣
逢事のはかなき夢のつきもせぬ恨をこそはしらせてまし
夢中逢恋といふ心をよめる
参議経盛
すかたこそ寝覚の床にみえすとも契りしことはおもひあはせは
中納言国信卿のむすめに物申てはへりける
ころ
前斎院新肥前

あつまやのあまりにさひしき軒はの梅にほひはかりそ恋しかるらん
夢枕恋しとよるもうつり香を袖にのこしてかへるらん 久我内大臣
つゆなから枕に恋をしのふれはおもひやらるゝ秋の夜はかな
夜はの嵐のおとそきこゆる 前中納言雅頼
恋しさをたへてしのふる身のうへを鳴蟬よりもなほそかなしき
題しらす 左大臣
羽をかはすつかひにもにぬ身のほとをうきになれぬは恋のならひか
百首歌中に恋の心をよみ侍ける
前参議親隆

吹かよふ伊吹のをろしのたゆむまにおもひしられてあはれなりけり
歌合し侍ける時よめる
あふことはよそなからなる身をかへて浪にしつむも世ておもへは 藤原清輔朝臣
なにはなる汀のあしのかりねたに[illegible]をあはてはてぬる 顕昭法師
題しらす 道因法師
おもひわひさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり
藤原仲実朝臣備中守にて侍ける時
[illegible]

後月を見て詠侍ける　権女房

数ならぬ身にはこゝろのおはかれはひとりもよひの月を見しかな

堀川中宮にてよみける歌に詠侍ける

中原清重

涙やは袖にかゝりし衣袖乃ひまもなく濡るゝ世は

鳥羽院御時くはしく人々に侍る時よみ侍ける

恋とよめる

藤原成親

梅かえにこの梅をおりしみるよりわかるゝ袖の[illegible]

寄催恋といへる心をよめる

藤原信輔

少将[illegible]のよそにこの夜半の[illegible]袖の[illegible]

後恋といへる心を詠侍ける

[illegible]人のおもかげ

月の恋といへる心を

涙川をおもふ袖よりおもかげの月やどるらむ

稀他人恋といへる心をよみ侍ける

内大臣

恋ひしなば我とやおもはんさもあらば思ひ出よかし

左近中将良経

[illegible]恋しのぶとも人の[illegible]

世にこひくからふとおもひきるすときこゆるこの
侘ぬかつらしける　右兵衛督隆房
行くゑなく吹風の前にまかせしるひとのみちはしめて
契しらす　従三位頼政
おもひねの夢にみえやと人をまちつゝ袖のなみたはかはしら
こゝろ迄しくやしきりの恋は思ひしらましとかりのあかぬ
藤原隆親
つれなさをしらてやしまし我なからこふるまてはぬれぬる袖
源光行

あらはれてつゝみし色をかきつらね人の人のあめかつ
皇太后宮大夫
契ふかきあはれの袖の袖もぬれてやへ人のまてはたえぬる
皇嘉門院尾張
命をはあたなる物ときゝしかとつらきかためはなかくも有けれ
契しとおもひきるまてみるはつらしける
右近中将忠良
何とかや忍ふにあらて苦しきは数ならぬ身のあはれなりけり
夢中契恋といふことをよみける
太皇太后宮小侍従

ちり萩風さめぬやそてのつゆまてにうきとこのものを　とこよ　とかや

今はかへらむ　　二条院御製

暮らしつる涙の露を別の床にぬれてたちかへるかな

けさの事　　読人しらす

ゆふこゝろぬ露しけく袖をぬらしつゝ別の床の涙よ

左大将に侍りける時百首歌よませ侍りける時

別恋の心をよみ侍りける　　摂政前右大臣

ゆふくれのこゝろを空に慕ひても恋しかるへき有明の月

皇太后宮大夫俊成

うき身をは我たにいとふいとへたゝそをたにおなし心とおもはむ

千載和歌集巻第十四

恋歌四

題しらす　　和泉式部

いかにしてよるの心をなくさめむひるはなかめにさてもくらしつ

見てもまたなかなか宵の物思ひにたえぬる人の

しりにくらん人のねをのみ

あやうしきこの世の中ふくつゆのしるる

花山院御製

ちきりてしそのことのはのあとたにも

ひさしくもかくてこの世にまたる人のとふかな

きゝわたりよよつらしと思ふなる
小式部
思ひ出て詠めし中の衾の風あはれ事とふ人なれは
大宰帥敦道のみこの中にありける時侍りける頃
かくいおりいてくるものして侍るをよめる
まはにとも吹くかせよりもあはれなる秋のあはれ
和泉式部
新しらん
われ人の心をあはれと思ひしを我身にしらぬ
とも人の身のうへにもありけるかな

藤原實方朝臣
竹乃葉にむすふ露よりのちも見し夜とこめておきし涙か
堀川院乃御時百首乃哥奉りける時恋乃心を
よめる
藤原基俊
春風もわかれのつらき袖をはらふ松浦の浪
藤原仲実朝臣
音羽川雪の下水にこほりとけて春をしるらん
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時
乃家にて花をおもふ心をよめる
源雅光

吹風にちらぬ桜乃花しもとゝめかつきせぬ洞のゆかり
逢不逢恋といふ心をよみ侍ける
大納言成通
わかれしといひし清水の末も我思ふ人のこゝろのかよひける
権中納言俊忠中将に侍ける時歌合し
侍けるに恋乃歌とてよめる
伊予三位　藤原敦兼朝臣母
恋侘て我とうちなけく事しもあれかし風をさくらむ
おなし家にて十首の恋の歌よみ侍けるによめる
未逢恋といふ心をよみ侍ける
権中納言師時
あふことのなき人をとし何の恨まし恋しさをたよらてめてわせ
前斎宮三河
うつりぬる世に川風にまつかひあけかはのこゝろの斎
ゆめにて後のかたみとよめる心を侍ける
久我内大臣
別くるわかれなんおもかはるまた気とく
崇徳院に百首歌奉りける時恋の歌とて
よめる
上西門院兵衛
我袖の涙やよその海なれとかへらぬ人を見るまかけ

あらしふくやの影は思ふ草葉におくるしも哉

前参議親隆

思ふみの夜は更け行くにあかしをぬる比にたえぬ思ひにかかるものから

皇太后宮大夫俊成

待賢門院安芸

思ふとのさすかの池に水草ゐて見せし(?)やさしく居(?)かれ

藤原清輔朝臣

かへとかさね猪(?)の身をつゝ梅の枝をしかしもなき世

百首の歌よみ侍りける時思ふ心をよめる

顕昭法師

今ははやいかにも思ひしみぬるを君まちかねて年のくるゝ

年の内に人わすれさらましかはなる

平実重

わさ海やさはなく小舟の木葉ちれの影し

影しらす

人のうへとおもひていまより後の月も見ぬほとすきにける

暮まちてとおもひしほとにすきゆく年の

参議為通

深くのみはるゝ事もなき身のためは年のくれゆく

思ふ人物いひかはす世にそまちける

たへかねてきえかね　従三位季行

君よのこゝろ猶思ひは河鴈けむの名もいはさりけなく

うき色のとのこころも難波江の色よつゝ

まつわたくさをよらん世路をあさか

院御製

松とのみやかね竹ひろとらはなく露よ殿

歌しらす

藤原季通朝臣

歌さへわすれものなきまはなきさ君を極める事を思ふ

従三位頼政

ふくるさゝれ花をとはさはわたしあまつめるを我かゆく物ふ潤ふ

むつかしの浦はちらし絵島ひゝあきにうれの

たらしきか　二条院御製

難波江はよそのきこえそめし鴬君かたゝむそ住吉

流れ添ひて　よるへ人の去てや

鴬のなくねをまれぬ乃に存らんふ声と鶯のこゝろあらく

源氏物語意をたのしみ読侍るゝる

見せたや露の梅かはいてつ見よりけく思ふ程は

わか鎮れと思ふか中乃てしきをかはらぬ人は潤なりけり

二条院の御時色のはおのこととし百首乃はやめ

久の時恵心乃心を給ふる

刑部卿範兼

月残る人のよふかく絶れは風めかつきちかくふくあらしの
歎しらす

前原為実

萬乃庭花ハわきても梅し残の園に人の家と見れ
さわらお

寂信法師

ちりまかふ雲井飛こえて見る月は秋もまちてやと思ふらん
おほゑのその秋の葉のさわきおもひなかつけてふかくつれき

空人法師

秋風の吹きし人をわかつをためか恋せそとて袖かつらは

源仲綱

ちさ人我あかと河岸風ふかは恋はたえすかつ見えるそのこと
寄滝恋と云ことを読侍ける

二条院内侍参河

待わひてさ夜も梅か香袖風にたちぬる涙の音こそ
見ゆる

恋歌とてよめる

讃岐

一夜とて夜かれし床のさむしろにやかても塵の積りぬるかな

百首哥よませ侍ける時逢不遇恋の心を
よみ侍ける

摂政前右大臣

なかなかにかゝるおもひを見さらましわかあふことをかきりとも逢見し

互不言恋といへる心を読侍ける

前中納言雅兼
おほとのゝ御子にて又からすハ家をもつしやうし飛鳥
俊頼卿と云る人此哥傳ひ給ふ
権中納言顕房
うつゝ書を伺ひてよきしさ物哀云ぬよつ月に盛るる
曙くれの空をとらえ小狭めきらむとんなまの
わかまての心みよりんと申さるゝ後つ
たし計か
右衛門督忠良
是ハ丹波やかやの宿のぬ風情ありとさにし此閑乃え
哥合し侍るる時過其哥をえてらしれる

俊恵法師
なにはの事を其後もそ海の根ハ毛とこそしにわら
殷富門院大輔
見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす
俊頼卿と云る人を傳ふ
従三位頼政
此頃ひとつのこゝろひてともふさしてゆみやとることに秘ふる
俊頼卿と云る人を傳ひ給ふ
藤原隆信朝臣
人ハはしめてひとつめて心をさまり花の盛りも色やまさるらん

希會不後恋　　藤原敦家朝臣

いつまてかなれぬ世の中川にあらむ世わたりのつとめにかゝからん

摂政太政大臣の時百首の哥に月に寄する恋

遇不逢恋をよめる　　源仲綱

思ひ寝のさめての中川浅からぬ袖のなみたに

初瀬寺思恋といへる心をよみ侍る

二条院讃岐

今更に恋しといふもたのまれすこれも心のかはるとおもへは

忍恋の心をよめる　　太皇太后宮小侍従

逢見ての後の心の名にしおはゝ世にはくらへんかたのなきかな

道因法師

待佗ぬ花にかゝる袖はぬれすとも

遇不逢恋といへる心を読侍る

俊恵法師

おもひきやうかりし人の心をもまちわひての山のはに

寄夜恋といへる心を詠る

思ひ寝の夜はまちわひて恋しさのつのる心はおもかけにみゆ

恋の哥とて読侍る　　法印静賢

身のほとはおもひしらでや忘られぬ人の心をうらみつゝみむ

摂政右大臣の時家の哥合に逢恋といふ心をよめる

皇太后宮大夫俊成

あふことは身をかへてとも待へきを世ゝをへたてむほとそかなしき

摂政家丹後

おもひのみ茂きこゝろに慰めしまたれしかたのおもかけもなく
契しらすす

民部卿成範

恋しさはうちぬるよひの夢にてもなとか人のみえさりける

うちとけて物やおもはむとおもひしにせめてもかくはこひしかるへき
おもひ知ぬるうき世かな

権大納言実家

まといつゝ宵の衣をかへしても夢にも人の枕ならひはとも
起し

讃岐

契つゝかさねし夢のひとつ枕にうちとけてねぬ物ゆへ
契しらす

右近中将忠良

これやさはおもひしことそかなしきおもひのたえぬとそいふ

権中納言通親

恋わひてはかなく身をもすてゝしかなほ衣手そかはくまもなき
あはれとや思ふ

千載和歌集巻第十五

恋歌五

題しらず　相模

うらみわびまたなく恋ぞ忘るゝ世の中をやなにと待らん

和泉式部

捨てまけり袖絞りてもさらせぬめの我身をさとこそつらき世なりけり

さともめしらかなへくに成ぬべし音に聞てもみえぬ命か

左のこの月みるさへよおきて人の名残をなるめかな

紫式部

恋わびてうき世の中を思ふにもいとゞいかなる物をかはなき

左大将朝光ちかくてかよひとこそきゝてつかはしける

かゝるせめてのみやわすれてつかへしける

馬内侍

年をへて梅がえもれし秋の袖しぼりけり君見ればはや我しられ

かつくひくるまの名しり音信をわすれなで

大弐三位

あまのはら

うきこひし命ひとつはわするれどなほうらみつゝ申ぬべき

みしよりもあはれまさりてかきくらしかくれゆく人のよにも哀

かさねつゝわすれてもいかにしなまし

相模

おりふしおもひやさし家蔵にあやしき高麗笛の孔と
世乃なかはよしやつら梅かきこしいたく何か
なにかつらしける　大納言なりの梅
世わらひ梅のある木を聞えしは我にたえし人つるとて身
時し物やきる世のりとふよみゑとはうらにも
きゆ代らとおもしろてこの色して侍るたね
つらつらけり　前兼盛
なりし人をみとしてあれ程は梅したり世ちよ中に咲ゆ
世乃りとよからぬ霜とものでうつになすむすめるを
かなの代をといひよりてけるかるた世あらうと

はらもしきる　赤染衛門
君わかれとしへぬさきぬれはの月見ちあらと申るさきんとぞ
中納言国信家乃歌合に恋乃心をよみ侍る
藤原基俊
人まに我身そとて乃歎川きりぬるかはねとてぬるむ
堀河院乃御時百首乃うたのとき時恨の心をよみ
道因法師
うみあり定れぬ人をたのみて過ぎおもひをはこそ待る命なから
花園左大臣乃家に侍りける女すまして世納言と
申すなる後徳寺中にいかるを見るにおとりけり

くれハ折るもやかへいろしむ花山桜あるをみなりける
桃よりも乃里にまさるつひにつゆもりけり

中院右大臣

あとうやこてとせまをえて山桜伏見乃里に新枕せむ
かくつひのくる待きれともおやなくへのみはとこにさ
わか涙身にむ城よきとしてもかなしむ

百首乃哥奉りける時恋乃哥とてよめる

待賢門院堀河

うれへとも有七とは思ひさやあかさへ有かくらん

上西門院兵衛

うかりける世に契を折りかひてつきせぬとまてなりぬらん

前参議親隆

あらましかいつ枕のうへおもふらむありつゝとも涙にきえ
ぬ月しらす

右大臣

こゝろなくとこらん世をもつゝて契も二たひわか身をしらむと

右近中将忠良

なすいかよ又乃雲をたなひくハこれや秋よあらぬ煙也

左兵衛督隆房

恋しなんうらみかねてもかけし思ひ人のつきにはかなき

太皇太后宮小侍従

春ゝゆとうれめか玉乃さ玖きくいかなるつゆにもぬれん

二条院讃岐

君こそ身の程をしいつくに世にわかれても海こそ

殷富門院大輔

かへりみもせぬ人よりもおもはれぬ我ぞかなしき

俊恵法師

君やおもふ我やおもはぬ恋つる契りとも知らて

登蓮法師

枕かみ人とはゝ何を忘れなきと思ふ

月影とゝをしのぶる

夏の月や池と思ふすかゝらぬ心ぞ

寂超法師

いさゝか月見すや心にもあらぬ物

恵みとみえて

祐盛法師

つらしとは思ふものから恋しさを我に

藤原隆親

思ひきや歌をよみしかひなき人

源有房

おもひたえて人まつほとの夢もなし

雅宗朝臣

えのかくれ行世をまつとせしまにこはなにおもひて

源仲頼

てらしろく秋の梅のゆくへは千代に逢ふ

海海路をとふるをとめる

鴨長明

おもひあまりうちぬるよひのまほろしも浪路をわけて行かよひけり

ぬるかうちにみつる夢よりつらきこそ

こはいかにあはれなるおもひのうちに

ならぬ

南川院中将

ちるとも世をうらみつ

百首歌よみける時恋の歌とてよみ侍りける

崇徳院御製

朝くされ暁のねやにおもふことのほかにつらき

左京大夫顕輔

年ふれとこひしきことのはにゆかりの

藤原季通朝臣

しのひあまりわれのみまさるおもひかな

皇太后宮大夫俊成

おもひかねうきにまかせてしのふれと

あらはれにけりわか袖の色

藤原清輔朝臣

わか恋はみかきか原のなてしこのあはぬ恨はかさねてそしる

上西門院兵衛

たのまんとおもふにつけて恨しな思ひしらせし契ならねは

恋歌とてよめる

殷富門院大輔

かはらしのそのことのはのあはれさをかねてしりせはいかにうらみん

題しらす

摂政前右大臣

わりなしや○さてもいかにとおもひしにかはらぬ人の心なりけり

右京大夫家房

逢見ての後はまさりておもへともしのふの山にいはれつるかな

隔関恋といへる心をよめる

前中納言雅頼

思ひのみ○に逢坂の関をへたてゝ都なる人のおもひもしるらん

九月つこもりころに女のもとにつかはしける

権中納言通親

世にしらぬ秋の別にけふはまたいつとも人の心もとなき

恋の歌とてよめる

前右京権大夫頼政

契りしにかはらぬ人の心とも恨みつゝこそ見えんとおもふ

前大納言実家

あさからぬ契りもしらて世に人のうきをなけきそ

悩東恋といふ心をよめる

覚昭法師

秋の色を池ありふと流るゝわと独縁覚の枕かへす哉

十首の哥人々によませ侍りける時よめる

前参議教長

ふるさとの宿より出てゝしまることも悲しき舎しかされおわれ

常在霊鷲山といふ心を

仁和寺後入道法親王覚性

なき人を思ひ出る世の中にすくれぬ根こそことさへくやしかりける

題しらず

源俊頼朝臣

これをみよむつの田わたりよそにてしまむしける川のわさ恨
さ説のわき雨の涙よりふる民も身にあふよ神しゆるらむ

馬内侍

されば露涙玉のさむけききよ独孫なむむねとや思ふ

和泉式部

ふるむをよみてわきまへける君と
あきさみゐていさこえの君から

千載和歌集巻第十六

雑歌上

上東門院にわらハ千歳とことなひはいまた
時よみ侍ける　法成寺入道前太政大臣
時にあへは今日わかせは奥山乃岩根乃松とやまとつまし
上東門院入内の時の御屏風に松ある家に
翁ありよわそひ志ける人あるところ描侍るに
竹河乃聖たちのかすふるよのかすかき尽ぬ風吹も松乃こゑし
大納言斉信
一条院の御時皇后宮五節たてまつられける時かし
日のしつき十二人ありける宮もはらすて物
まゐりてすしきせられけるにわかきもおそひと
わらはとものとけにけるをとこれむすひけるをとて
いふかしきて中納言実方朝臣ひとりきてかく
読侍て
あしひきの山井の水はこほれるをいかなるひもの
とくるなるらむと云ときこゆる返事によみ
侍ける　皇后宮清少納言
うは氷あはにむすへるひもなれはかさす日かけにゆるふ計そ
十二月廿日門をたゝきてまへ御わかすと恨から

男ともかくてはとおもひあらんやといひつかはしける
返し侍るとて　　上東門院式部
あさちふに風のたよりに鶯の露にこほるゝ宿とらん
藤原実方朝臣の家の井のもとよりつかはしける
妹してあふよもつきにけり朝によなよなつかへしきを
藤原道信朝臣
かけふくたのみし物をあさかほのいかなれはうつろふ
二月はかり月のあかき夜二条院にて人々
あまたゐあかして物語なとし侍りけるに内侍
周防よりふして枕をかなとしのひやかに
いふをきゝて大納言忠家これを枕にとてかひなを
みすのしたよりさし入て侍りけれはよみ侍りける
周防内侍
春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名
こそをしけれ
大納言忠家
契ありて春の夜ふかき手枕をいかゝかひなき夢になすへき
一条院御時皇后宮に清少納言はしめて
侍りけるころ三月はかりに二三日まかりいてゝ侍るに
かの宮よりつかはされて侍りける

皇后宮式子

侍らむ人も心ざしありとて世をそむきて侍りけるに

ける ―― 清少納言

露おきてしものはらふ袖の上をはらひつゝ涙のうへの
おきゐしくおもひされかきとるもの心にも女房たち
一首◯に旅をわびてあはれなることのよしを
重ねて旅のつらさをも思ひしらるゝつらきも

なる

遊子内親王

あひみむと思ひしことも旅にてつらきにいさゝかなる

遊子内親王ありける院の御時

いかにして旅人の車にのるときそへてよみけり

つかうまつりける　郁芳門院中将

みそぎしけるとき川浪立つわたりの中に世にかくれて
ものおもひつゝひまもて秋のよの宮にかはりて新院

女房よみ侍りける　藤原実方朝臣

手をつけて摘みさかえたる桜の花によみて草枕を
頼みしものゆゑの人にこふれば恨みても大宮の
花のみ見て花ちらむとつげて旅にして人の
こひわびて旅の身にしておもふかな

和泉式部

かゝりける事なとそ御らんしける八幡宮にまうてゝ世にさかえへきよし給
上西門院のものゝけといふ事申けるときこえ給ひ
ひさしくかよひけるものまうてしけるに母
ありけるに侍る　八条前太政大臣
きかせ給ひて長門守みつからきこえける涙
ふるさとの花きかれは涙も

侍きよみの日御祭林寺のみちのほとりにて
何となく侍るをつゐにはつらきものを
宗
　　武子内親王
なくしや猶あはれなる世にしもあり涙袖にけれ

右近大将にて侍りける時中院右大臣中納言
にて侍りける時は猶こそあれと侍りけるに
つきさいはひてことにあはれなる時の月を
見てまゐらせてよみつかはしける
　　大宮前太政大臣
たとへみてもあまたの中にあはれなるを
　　返し
　　中院右大臣
何事につけても時にあはれなる
右大将兼長卿の上卿にて候ける
ときに藤原顕輔清輔なと六位にて侍るに

思ふことありける頃将監にさせて侍りけるをかしくみえ
られける又の日内にまゐりてよみ侍りける　左京大夫顕輔
きのふまて思ひしことはわすれにき身のうれしさのかきりなけれは
上東門院に侍りける女房をさそひ出してわきまへん
女房のせうとこのつかさにて侍りけるに申つかはしける
ときこえ侍りけれはつかはしける
小式部
露深きさかのゝ山のあきかせにむしの音をこそきくへかりけれ
二条院の御時さくらをみるとてとも

春の月みてつかへていまたゆるされさりけれは昇殿
申しけれとゆるされさりけれはわきまへかねて殿上人
ともあまた女房のもとにまかりて侍りける
従三位頼政
人しれぬ大内山のやまもりは木かくれてのみ月をみるかな
三条前斎宮源子遁世のゝちわつらはしきことありて
月をみてよみ侍りける
権中納言実綱
数ならぬ光とすまて思ひしを思はぬ月の影にやあるらん
月の友となりぬるを　仁和寺後入道法親王

こゝ人はおもひかへて見る月のくもらは袖のぬれもやはせむ

月の哥あまたよませ侍りける時よみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

さゝ浪や国つみ神のうらさひてふるき都に月ひとりすむ

わすれぬる都の月はいかにしてやとりふるさとのつゆをみるらん

題しらす

中務卿具平親王

嵐ふく月そひかりの数の光は何事をたかはぬとひおもふし

赤染衛門

思ひともみゆるにあらはやとこひ涙しほるゝ袖の上なる月

ゆかしみえん

なかめつゝ昔も月は見し物をかくやは袖のひまなかるへき

和泉式部

眺めのこゝろのあはれなりしも我身ひとつまことにの月をみるかなや

おほかたの秋のわかるゝ比月のつみしくおもひ侍る

よろこひ侍る

久我内大臣

かゝらむと思ひし世の中のおもひてよ有人とも山すみの野邊

山家月といへる心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

すみなれし月とかくおもへみやことはわすれなくなみたにやとる月

百首の哥よませ侍りける時月の哥とてよめる

前参議親隆

くれなゐにゝほふ川辺ゝ嵐こそ絶間ゝ峰ゝ雲はらふなれ

月前十首歌よみ侍りける時

藤原家基

浦千鳥あかつき方の月影にともに鳴つゝ月の残る月さえ

俊恵法師

一かたに流るゝ清瀧川にすむ月はさらにさえゆく秋のよなよな

賀茂成保

大かたの思ひのほかにかつ見えて月の光は露にやとれる

観昭法師

さらぬたに心ほそきに海山の月をなかむる独ねの床

藤原清輔朝臣

ゆふされはよるへもしらぬ月影にこゝろをさそふ秋の初風

心にはなき月かけのよるの月をなかめつゝあはれとみるかな

てらす月のこゝろをしらて遠懐ひとりあるそ悲しき

登蓮法師

ともすれはかへりみらるゝ人の身に残るゝ月にいつまてかあは

数ならぬわか身のほとはしられつゝ月をみてこそ侍りける時

とひくるよはこそ侍りける

法印静賢

何となくすみうき世に絶えぬるはこゝろのとかにすめる秋の月

月乃前おもひを述侍ける時つきさしの月乃
心をよめる　　源仲正
ことかくは我世のうきを忘られつゝつきさへ月を待つる哉
見月忘憂といへる心をよめる　　源仲綱
何とかくあらし今やこよひ思ひ出すまゝに我も月を詠(上)
百首歌よませ侍りける時月乃歌とてよめる
待賢門院堀河
都ほく我世をのみとおもふにかひなくて月にむかへる心なる
従一位藤原宗子やまとにまかりてよみ侍りける

しくれつゝ侍りてむかしをおもひしるしとそ参せ
させて侍りけるよつゝみしける
崇徳院御製
浮雲のかゝるわくらはしるゝのちはあらはに月かけを
みちのくのおほ寺よりこえてわかれて出侍りけるあ
つき月のおもしろく侍りけれはよめる
仁和寺後入道法親王覚性
秋風のふきしく月のかけたえしやまかけもとまりし
月の歌とてよみ侍りける　守覚法親王
ことの音を空にきこゆる夜半の思ひ月にたとふるかけのまことそ

権中納言長方
わすれんと名残を思ふもやゝうくまよひの月哉
殷富門院にて人〻百首歌読侍ける時月
乃前にてよめる　　藤原定家
いつまてかさてや世をは厭はすも秋の月も涙の露を
影しらす　　藤原家隆
おのつから松乃嵐やさそふらんみね乃月影
ことにみえなん　　八条院六条
よしの山かひもなきさはのみと法印乃月
法印実源

世をいとふ人は月をや見つらん心のうちの影ならし
藤原隆親
さやかなる月見るからに庭の面の露はをきかふ人やある
ふる月は見るらん影を侍ける
円位法師
雨そゝく軒の玉水月あれやとこそ
世をいとふ人は西山にかたふく月影もをしみて
つらき影かな　　平実重
何なれや心はなくて西へゆく月はさすらひの宿もなし
数ならぬ身をよめる　　俊恵法師

春乃梅花はかすみにかゝりて月はさえぬもよそに千歳よりかぞへ
月も上月とみる心と　藤原家基
さとこそは都のつきもせめてはと思ふかなしき身にも有る月
加茂社歌合に月乃歌とてよめる
藤原親盛
何となく涼しき神の心にもぬる月に桂乃露やおくらむ
家暁霧といふ心をよめる
大江公景
月影のかくれの霧に立出て立ぬる月とみてるかな
家月といふ心を　静蓮法師

さそふ乃山のはしらぬ雲たえてもまくらにやかゝる月の
月照寒草といふ心をよめる
紀康宗
山深みさやけき月のかげたかみ霜の上にぞ照る月影
月照山雪といふ心を　法眼長真
雪のふるさとなるかなやそらの月さへ雪にまがふかなたまずと
嵐の月といふ心を読侍る
藤原為忠朝臣
ゆふあらしに雲吹はらふ月よりも見えさえのぼる嵐の月
暮見月といふ心を　覚延法師

嵐ふくやまのおろしのかきなれはこのはも枕にやとる深山の
錦しらす　法印意圓
山城の三輪の御社に侍りける時月をみてよめる
月影の入ぬる山よなをてらすらむやみのまよひ（かとい）の末の世
播磨前右大臣の家にて百首の歌たてまつりける
時花の歌によめる　俊恵法師
世をそむきて年ははるかにすきの月影をみてよめる
月のうちにすめる　圓信法師
なき世にもいれあふらしなみのまよひ月はひとりはれぬ

二条院の御時四代まで仕つりて歌をこひく
法師かきて　皇太后宮大夫俊成
いかなれはさやかにてらす月影のみもひとつにこそあれといひけん
堀川院の御時百首の歌たてまつりける時述懐の
心をよめる　藤原基俊
慶円上人といひける人にまつりてよめる歌を
僧都覚忠といひける人の法性寺入道前太政大臣の
子にやしなはれ侍りけるにつかはしける
うき年もたのまれぬよのなかにいつしか

契をきしさせもか露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

連と出る首尾か鐘なり侍る中にもよめる

源俊頼朝臣

世間かんわゐけれとも何ゆへ成ぬらむ涸さへしらるゝ

述懐の心をよめる　覚寛法師

すまゝにいふなる秋の夜の夢のはかなさもうき世にかへき

道因法師

はかなしやうき身なからもあらましかはこの世をいとふ心なからは

書写寺に詣して侍りけるによめる

おもふ心のかなしきをうきよの外にゆくへもしらす侍る

源俊頼朝臣

ゆく末を思へはかなし津の國のなからの橋も名は残りけり

長柄の橋柱を見て　道命法師

何事もかはりゆくめる世中に昔なからの橋柱かな

おなし所にて　道因法師

くちにしはなからの橋は跡たえてむかしのみこそこひしかりけれ

津守國基か海よりて度住吉まいりて

おなしけしきを有基よくしてあるほとに

波まくらして侍る所に人のあはれとも

ちりてみし何それは松のつゆけり

てかへらせ給ひける　津守京基

みこもりのはまかせにさむし住吉の松風寒しさよふけにけり

吉野の瀧をよめる　中納言経忠

白雲とみえしはやかてみよしのゝ吉野山からくる瀧なりけり

さらに大覚寺にまかりてこれかれあまたよみ侍りける

に瀧をよみ侍りける　前大納言公任

瀧の音はたえてひさしく成ぬれと名こそなかれてなをきこえけれ

屏風に瀧落たる所よめる　前原長能

ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか瀧の糸すち

京極前太政大臣布引の瀧見侍りける時よ

侍りける　六条右大臣

まよふ乃そて白雲と見え落る布引さえし布引の瀧

竜門寺に詣て仙室に書付侍りける　能因法師

わすれにし山の中にかゝる宿はいつの仙人のすみかなりけむ

おなし龍門の瀧をよめる　菅原清輔朝臣

仙人の昔の跡をきてみれはむなしき床をはらふ谷風

布引の瀧をよめる　藤原良清

音にのミきゝしハことのかすならて名にたかきかな布引の滝

ひろ八幡月をみる　藤原朝方

あきの夜の月をやしのふ慰みにつきをみて思ひかなしき

堀川院乃御時百首の哥たてまつりける時櫻乃哥

よみ侍りける　大納言師頼

うつきやまとてもえてぬ花のみにほひぬるかな

櫻の御時うへのをのこともの哥

つかうまつりけるに絹衣といふことをさくりて讀侍りける

權中納言俊忠

くれはとりあやにこひしき世の海の鹽風にあひたる身の歎

百首乃哥乃中に松を讀る

修理大夫顕季

玉藻かるいらこかさきの岩根松幾世まてにか年のへぬらん

夏草を讀る　源俊頼朝臣

塩みちてハ野嶋かさきの浜風に浪こす松の風の音かな

廣田社乃哥合とて人々讀侍りける時海上眺

望といふことを讀侍りける

權大納言實家

わたの原秋の〇〇山の端を見てなかめやる沖に
あまのつり舟

權中納言實宗

こゝ浅茅の風にはかに吹て波は雲のことく見えけれは
かくとおほきなる沖にて波は雲井に海人のすむらむ
右衛門督頼実
眺むれは風をときなる
あふみの海浦なみたつ沖つしらなみ霞にかすむ沖の舟
円玄法師
藤原季経
長寛二年海上遠望といへる心を
和歌所にてよみ侍りける
祝部宿祢成仲
海くもり浪とそらとやひとつになりぬらむ沖の白波
和泉式部(?)

千載和歌集巻第十七

雑歌中

五十の賀よりゑらひたる文のとし鳥羽殿の桜
の盛りに花見にまかりてよませ給ひ
ける
鳥羽院御製
むかしには山といまたふる桜花けふのけしきや
咲花の名をも惜みける
仁和寺法親王守覚
もろともに見し桜もいまは世にはなき人の名も
保延(?)春(?)の御方にまかりて花のさかりに

院の花盛なりしを見て讀侍ける
僧正親範
貴きも花をしも見しはなれぬかさしのこゝろ
みしらなくつくしは東山乃花見んおかこさ
きらは円融院の花わきしはるかにわきてたらく
讀侍ける　前中納言基長
一所にふりさりわきとわ山桜をみは我とはいつかみんらむ
遁世乃後はじめの所とてよめる
皇太后宮大夫俊成
雲の上に春くれことは思ひつゝ花は数ならぬ思ひ出もなしと

石山にまいりてまかりけるに宮こを出しに風雨哭
風清みのりしより車をかへしこの世はいかに
やこそかれてさゝ涼しらんてかゝる世に侍りてよめる
東三條院
わすれしないにしへのわかさ月の今は限の秋をこそ見る
山ぢりの月の影まて志らずともひなし志侍る
時讀侍ける
前大納言公経
分いりて入にし後は桜かけり山桜の梅ことさら今
春れしつわくらまのわてし絶ぬる
うつせともしくれ霞の溝つり乃んみ山さとへ徒るかわきわ

歌よみ侍りけるに　和泉式部

花さかぬ若木こそあれこゝろあらはさくらも花をおもふ身にしる

前大納言公任長谷といふ所にすみ侍りける

ころつかはしける　法成寺入道前太政大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつに音せで春のくれぬる

山寺にこもりて侍りけるに人をとかくいひ侍りけれは

きりよ命のまゝにまかせてむ涙きらつゝよ

そえん　道命法師

かくてこの歌をなむ山寺に籠りぬと人にいひけれは

除目にはつされて歌よみける時　範永朝臣

よつゝしもせん　大江公資

身こそふ涙の川にうかぶとも身は歌の名をおもむきて

寄歌述懐の心をよめる

源仲正

根ふかくてやまもと【思ひこまれ】つきせぬ世々の露そおほき

世をのかれて後白川の花を見てよめる

圓位法師

散をみてかへる心や桜花むかしにかはるしるしなるらん

花の歌あまたよみ侍りける時

花にそむ心のいかで残りけむ捨てはてゝきと思ふ我身に

佛には桜の花をたてまつれ我後の世を人とふらはゝ
世をそむきて人のもとに春花をつかはすとて　寂然法師
この春そ思ひはかはる桜花むなしき色にそめし心を
数ならす
世間はつゐの住かと思ひすまはそれ花のかけにはなれさらまし
家古てつかのまきこえ人のちられとる
白川の花さかりにまうてきてのちかく花の下より
帰りしとされ侍ぬ　後人志て次
明暮世の中に身はさしくも春は桜にわかれかねけん

花さかりに法成寺にまかりて雲林院のをしへ
風をみて読侍ける
皇太后宮大夫俊成
梅のはかなきちりしを見ては桜花ちるを待つとはしらぬ春かな
庭花散落といふことをよめる
源定宗朝臣
桜花ちらさしと思ふすへ人をもとむ心は末の露かな
為信法師すゝめける百首の歌の中に
花の歌とてよめる
藤原定家
はかなくも風をも世をも恨むかな吉野の奥も花ちる比の

花の前にてよめる　源季広

惜くはおもふ心はいつも世の中に花もちらさらましかはと（むかし）

家に桜をうへてよみ侍りける

源師俊朝臣

老の世に宿に桜をうへつれはくらへて見むと花をまちける

高倉院東宮の御時桜花に侍りけると奏し

めくらし侍りける時賀茂社の歌合とて

人々よみ侍りけるに述懐歌とてよみ侍りける

権中納言実守

位山花をまつまに年ふりて雲の上にそなを[illegible]りと

崇徳院の御時十五首歌奉りける時述懐の心をよみ侍りける　右兵衛督公行

春日山雲ゐはるかにとほくとも北の藤の末葉数ならぬ身を

歌奉りける時述懐歌とてよみ侍りける

前左衛門督公光

物おもふ心や身にもさきたちてうき世を出てしるへなるへき

述懐の歌とてよめる　俊恵法師

数ならて年へぬる身は今さらに世をうしとたに思はさりけり

道因法師

いつとなき[illegible]

述懐哥よみ侍りける時前白川院にてよみ侍りける

きのふみし思ひはあとくらへはや

藤原家基

いかにしても庭にすみける白川の水のあとたえぬる身をいかにせむ

底のにこれるよをうらみつゝ

藤原盛方朝臣

うき身をは我たにいとふいとへたゝ[illegible]

右大将実房中将に侍りける時十首哥よませ

侍りけるに述懐の心を

中原師尚

数ならぬ身をうき雲のはれぬかなさすかに家の風はふけとも

学問料申侍りけるをたまはらて沈侍りける時

ちかひてしわか身は深くなからへはしつむは深き

大江匡範

なにはえのあしまにやとる月みれはわか身ひとつはしつまさりけり

題しらす

藤原公重朝臣

世のうきをおもひしる身はなかなかにかくてもありしむかしこひしき

菅原光忠

引かへてなくなくつらきおもひつゝそとくるしきこひのみちかな

一条院旧侍参川

いつ我ひとり、夜をしのきて昔よりのこれるをかたらん

按察大納言家歌合に述懐の心を

よみ侍ける　　源師光

見しにかく侍家ぬ物に身をなして生れぬ後は世にもしらなむ　さきイ

つみふかき世にまたやとるそ辞中きる時雨心

行末はかりもしらてつかへつる家なる

源俊重

今はとて世を渡る身をしらて思ひもしぬ磯浪に揺られて

あはれなるその山さとに住むなら吹きそふ風もさひしかるらん

きゝらぬ秋になりける　源俊頼朝臣

ふか草のみ山の宿はあはれなり夜を付てや袖をぬらさむ

山田の庵にもきこえくるかなとりあかさん

橘盛長

としふれは鏡のかけもかはりはて立のほる雲

堀河院の御時百首の歌奉りける時山家の

心をよみ侍る　二条大宮大夫肥後

山里のすまひにすみなれぬれはなれにたるを

長月のつきもそれなりにのりて海をしてあはれ

夜のなきこと宋かくさひしさにしくさなれ

をつつるきる　藤原基俊

物うさはこの比の思ひ出にしてやまかやと命のこ

出家しておもひの月のあはれに侍るに空の

きりしくれなくて侍るよしみえ侍る

後京極摂政

これ世にはいはひやつさぬ思ひの風もあらし

我かへらす　　和泉式部

命あらはうき海にたゝ世をまつぬ物をみよ

紫式部

数ならぬ身にありしを思はむ世の人とかたる

たまよつらきをの　　前右近中将信

義ことも浦に我と思ひせしもの世をかへし

前大納言公経かゝる人々の嵐

きしかたもそのかげつもりきぬ

中納言定頼

あつまの旅ゆく風に移ろひて花の嵐を思ひやる

花風のあらしにこと小窓の末にあはれ

前大納言公経

前大納言公経かくも侍る

二条院讃岐の法服かくとも

宗于　法成寺入道前太政大臣

侍りし時思ひかけずや見へけんしかくさし申しゝ法の衣を

紀し　入道大納言公任

むかしこそおもひたれ衣は法の衣とならむとは思ひや

おもしろしの人のよむ歌なる

三条院のくらゐさせ給ひて後に院の御まへにて

宗于かあけ書乃指はおもしろき事共よくつかうまつる

くらつれあるよむこと此歳ありけるを見て其

ときよ此侍従のゆるしよつかうまつり

舞れめのと

むかし書の指ならは宗于とさしつかうまつる

事聡子内親王仁和寺に住み給ひけるに

か宗于かのこゝろを三のみこのりまさく

られく侍るをつかうまつる

輔仁のみこ

おもとの宗于かのもとにあまたはかへさせ給ひし

紀し　聡子内親王

おもとにありし右府の桃のもとにかきあつめてと此河

大納言公家の家のことを三十六人集とかきあ

くめしつかへしたるよ故大将御門の

右大臣のかくて侍らましかはさこそはよかりましと
つかはしける侍りける

大宮太后宮

末風もよにかなあつめさらまめと別路の秋の人とこそ
知し

権大納言公実家

このとしよりかはと風をみんともはしけれ
高野にまかりて侍りける時山路にて詠侍りける

仁和寺法親王守覚

絶えてこそ世をのかるへきみなからやおもふなき苔の衣さへにはわ

述懐の心をよみ侍りける

なかいきのおもてをも知らぬ山の井はよにふるまゝのうき世

大覚寺にまかりける時峯の岩屋といふ所にて
よみ侍りける

前大僧正覚忠

庵とおもひし岩や風の苦しくもよるの袖かなぬる

述懐の心をよみ侍りける

大納言宗家

身のほとをおもひすてゝや思ひけんかくてもよにすみ侍る

右近中将忠良

数ならぬ身にも月をも見ぬ世とてもなくさみ

二条太皇太后宮別当

松門におとつる人もなきものを月のみすみてとまるなりけり

百首歌中に述懐歌とてよめる

前右京大夫家

とのつまのまへにありし世にかくいとはしと今はみえぬるかな

摂政家丹後

うきことのつもれとつきぬ世の中にいつまてかくはおもひすくさむ

題しらす

法印偏昭

かゝるよにあふみの海に位山たかきいやしき身をおもふかな

十月に色服になりて侍りける人のもとへつかはしける

僧官ともかゝりけるときこえてよめる

中納言長方

まはらの花さく春とこそまちしにかつ根にかへる秋

題しらす

前参議教方

来世にもとらむ世の中と思ふへき人はかつかつきえぬるものを

来世も国にたちかへる時ありし海なるかなとしれ

みなとわれてのりそこなひまた時そのこ代にとまる

家のかとみえて歌のみちよりつたへつゝ

前右兵衛督推方

式部卿とよみけれは国司なりけるものとふらひて神祇

世をそむかんと思ひ侍りける頃

定人法師
かけりよゝすみ風情を擬さんと思ふ今はひたすらかなしかりけれ
忍ぶれとなほよしてまつ園よきかなしきを
まちわひて京よのかはて住吉乃風しらぬ
月ゝかゝて流され給ふ
平康頼
思ひやる心の浦波立ちかへるとも我こともしらん
遠流の時流され給ひける時
登蓮法師
かくしつゝ嘆く世の中とこのいへよまつと来まほしく
浮りかはりかはらぬわかよはる時こそ

覚禅法師
思ひの○あくかれ出てゆくゆくも身にしみまさる
世の○よそにまつとて我思ひいくとせへぬる
権僧正永縁
春とのみ世の人ともの見ゆらむ秋さへかよりていつとなき
よつ梅さくらたわわく雲林院なれは雨よきかな
さらまくのつらくわきとれもつらしく
良暹法師
は世をいとひ雲のやしまかよひて鑁ことおもひみんとそまつ
数しらぬとみへしらむ

すゑまてとの海とちひ(?)頼みけるわかれさへ身はかなしき世なれは(?)

紫式部

述懐百首の歌の中に夢の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

うき夢はなこりまてこそかなしけれこの世ののちもなほやなけかむ

百首歌たてまつりける時無常の心をよめる

藤原季通朝臣

うつゝをもうつゝといかゝ定むへき夢にも夢を見ぬよなけれは

はえても惜思ける(?)ものゆへ(?)わかるゝみちの世をいかにせむ

上西門院兵衛

うきや夢なれとさためなきみさを思ひはてゝも見し世をかなしむ(?)

花園左大臣家小大進

あすしらぬ身をむなしき風雲の行方もしらてくるゝ世にまよふかな

前大僧正覚忠たのみける大嘗会よりかへり入

て神仏にすゝめて金泥法花経書供

埋みけるとて五十日こもりて侍りけるに

房覚入熊野のかたにまかり入て侍りけるに

とひにつかはしける　前大納言成道

たのみぬ命をきみにまかせてさらに歎きのあまり悲しく

題しらす　　前大僧正覚忠

うき世をは厭て入にし山なれと虎ふすやまもさそなかるらん

閑居の数とはいつくらんとおもひける

仁和寺法親王守覚

哀をくみをとかはに吉を〇はこひつゝよこ庵してきく

まつかせにさそはれて行ちまうつよ奥院に静蓮法

師の庵室にまかりてあかつきかたに衰に見えて

よみたちてつかしける

権大納言公国

有為の露霜のそらしと思ふにも世をのかれし草の庵かな

梅の比山に罷て横川の安楽谷の僧房のもとに

まかりわきところに法房なん障子に書付侍

る

藤原公衡朝臣

ある城さわに偽なりしかは捨よそにこそ苔深の袖

題しらす　　法印慈円

おほけなくうき世の民におほふかなわか立杣に墨染の袖

寂蓮法師

さりともと浮世をそむきて西へそすゝむ月影のつまよりもいつる世の中

殷富門院大輔

はやくこそおもひ入しか暁の寝覚の床を見るにつけても悔しき

西行法師

海こ路ますさてとやゑねてつきし孫兵衛そわぬ命なりけり

六条院宣旨

先見せんと見たる物こそかはり名れとれつまみ世界ねは

こ海つくしも三思ひ立人会ん我わすれなりしかな

筆れとといくとこさて

二条太皇太后宮武部

りまハこれかものゝみえぬとかたてのとれもかくとも成海さらかる

郡しら寸

元人法師

大野川に千代流るゝ身とかはしくるやくとくへよせてける

病ありて東山なる所にかくれゐ侍りけるに

て侍りつるを人なんとひく侍らぬとよ

める

大江公景

名の山君をもいぬとも枯れて昔の跡さへてこそ人さく住

法眼兼覚

歎きつゝも

かつらくまとひし霞のとまもさえも枯ぬ（よそ）よ人わすれ

なわなる

賀茂社歌合に述懐歌とてよめる

寂蓮法師

世中ハうきてわれ思ひ立てたにつれなきまゝやハ

山寺にこもりける所にて房にて海わたる

人のよろこひをそむきいくはかなれとは
たえかまへ　　覚俊上人

世をのかれしき草の庵に墨染の衣の色ハかはるとも乃ハ

源清雅九月ころわかき法師の山寺に侍りける

と人のこひいくはかなく思事せよとや侍りけれは

よみてつかはしける　　源道済

思ひやれあきの山寺すみわひて袖にまかふ嵐のこゑと

題しらす　　円位法師

わかやとは嵐にあらぬ鐘の音を風にまかせてきくそ
きく

いかにせむ我をと源さ海しといひ出て浮世に深き山寺とも

述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とて

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿そ鳴なる

嵯峨の山寺にて読侍りける

藤原為清

おのつから鹿の音を聞山寺の家のまへに

題しらす

藤原宗隆

大宰大弐重家入道身まかりて後山寺懐旧と云

事をよみける

藤原有家朝臣

初瀬山いりあひの鐘とさためしはむかしの事も成にけりよ
春は人々我もわれもとつらねて文の詞おもしろく
の暮方のおもしろき花ちりかゝるをみてむかし
をおもひしのひて心さしを思ひつゝけてよみ侍
ける

権中納言通親

ちりつもる苔の下にも桜花おしむ心やなほのこるらむ
此うたは前中納言雅頼卿かくれ侍りてのち
小野宮に侍ける時より殿中にて世に
きこえゆるされてのちまてもよませ給ひ
けるとなむ

前中納言雅邑

うれしさは我身ひとつにつゝみしも昔の人にみせまくそ思ふ
還昇せさせ給ひて人々のよろこひつかはし侍
ける

藤原季経朝臣

うれしさを今は袖にもつゝむかなむかしの人にみせまほしさに
今上の御時五節の殿上侍従定家朝臣やまひ
わつらひてまいらさりけれはおなしく五節の
こゝろをよみて人のもとにつかはしける
のやまひの頃より此院よりおほせありしに
程へて後にいさゝか年長くなりにけるに
さらにそひて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

わかの浦をしほ…ものかりてまつ

このことを…行末にかはらぬ家

のもりけるこゝろ…ましかは

つたへしに…

御せつくる世と御いさ…

…

藤原…長朝臣

藻…の露をとめて…

この道…

…の人中…

千載和歌集巻第十八

雑歌下

短歌

堀川院御時百首歌奉りける時述懐

の歌よみてたてまつりける　源俊頼朝臣

とえ河　瀬々の岩かと　わきかへり　思ふこゝろは

おほかれと　行方もなく　せかれつゝ　底のみくつと

なりはてゝ　冬の氷の　下にのみ　思ひむすほれ

…　いつてくえ　みまさかな　…

こゝろなく いく舟まよ あけぼのゝ 浪のあらまし
あしまとも いかりおろす 見えわかれ 梅とともにる
こひしさよ 春の舟ゆけ 見わたせは おきつ白波も
なかむれは 何事ならむ あはれとも 思ふ人に
霞こそ おほろ月夜の うらみて いかて見れは
行かよふ いつも浦に うきさつん ことはのさみ
吹く世れ 春しき来ける うき雲の ことはのさみ
行梅は あはれ秋よ 露のよ 見へぬ人に
世わたし もしも来よ 落しりと まゆみ風に
まわしぬ 行くえるの ふりめしも 雲の上より

吹ふへとも あらしのも いさよひの 月のかつら
ねられぬ袖 うきくもの さえわたる ひとりねられ
梅せさに ともに山に わくらはく これこのたよ
あら浦に うつりみれ あさひる 花のあかしふ
ねさめつゝ 後の世とに とおりさし 思ふ日もとく
かつるて 月つきかし まとひぬる うつら鳴
清きてあく 絶わたる舟を かきの雲ハ いつれ十よ
みわたせは いつも浦ハ いさりれ 老の海もと
さえのしも 舟とへはわ あまつく ともかもれ
よくみえとも 夢よりさ たちして ひま河海よ

みよしのし峯をもたし花の色のおかまの末を
嵐山にてもちかく嵐も知らしまつ返らくりんなつさと
名あらしそん桜も心を嵐そすむ翁也もな秋
きのふ
おもひしはかのこつ猿わたるひくきよめ雲ふ
何乃えの塩よたちまうつせろいうしなも
なせもそく恋ふわぬ世の中よみなふことを
見嶋の浦は恋にうら猿つうれしなるへし
ぬれしは鳴尾の雲のつまくといとつへ哉
うきつめてわか恩を出んゆくまたん人かぬめふく
よのつりあまのあはなれもちの袖ぬれ

霊ある乃わかはなさく花も世にそ色とはしられ
みすしら杉葉をさようつされ紋名もあつまる
津なん園の生田乃森のいつあひるあさ霧縄
こわるへし色よそもぬあとうむらん
夜前
世間になれ男を教へあをこそ来るをもや思ふはまつれとも御製
わか
百首に前めしきる時よ世路よふまれ
景徳院御製
宰よしまや風をきれつまりわとこけふるわ
ひさしての天津神代よちゆゆてみそりわまわ

そもそもは 流れも久しき 八雲とは おこりもかはらぬ
言葉なる 花咲く後は 百草の たねと見ゆるを
ちかくに 風につけつゝ きこゆまで ちりかなめよ
かは河なる おもひをはらく さまみの こゑよろしくに
かつらくく 津のかさ事は よみちとは 秋もかはまで
ときめしと 出でしかりとも はせん園の 難波の浦の
何となく 秋の寸よ こゝろの我 出でしかりし
あこかれて よの人さへは まつれ ともかりや女房
おりくこゝにも 見かともかへ うつさずつけて
おかし 百首部 まゐらせし時の まつりこと

待賢門院堀川

とほきぬ 岩間も水は らちもなく むすひれ流
こしかさまに 何にか心の みたれつる ちらぬ月の
郭公 鳴くと 聞く夜ゝて 袖の浦に 宿る月を
わまよや わ花を見て こゝ悔ゆを 浪にまよふ梅
待つ秋の こゝろも心 世すれども 君によりてを
かくすには 幸見たて よしかれ草 よしなくかゝく
須磨の江の 雲のちとせ にとくと 構へことに
さつゆへよ 春日のを 毎にしも かくも浪の
あくさかへて 梅のかの その方に 色梅ゆきて

よすれなし　我家風あてこえ乃こゝろやと　光俊朝臣
あつめれと　いさゝ嵐ふゐくいつ　霜のまゝしふ
おもろく霧　ふれあつめらきくれよ　わさきれいえそん
うくれなく　まれの花をとしる乃　うれしからや
あらんこそすらん

旋頭哥

志ほ津やま風ゐ人すゝきわかそら残はそこの
かわらぬわかなれみかりしのそらもし風朝臣
よつからしなく　源仲正
われはみ地のやへ乃霧をはせこれも君まかへ〇〇まなとぬる

くあからうしそまれ
源俊頼朝臣
おきし
かきのこえしものつきこしねさまれし色ゝこそのあら露
きれくしのつきさて

百首哥たれまつかせら時振の山をと殺く
左京大夫顕輔
あつま地乃野澤乃風ましひとゆひしてか
まつのと岡新まかへ白

折句哥

二条院乃御時こゝろしきこと梅の字を句の上に

ともに旅の心を　源雅重朝臣

駒なへていさ見にゆかむ立田川白浪よする岸のあたりを　おもひのこす人のふみ見えさへさそひ捨て

仁上法師

何の秋かくそうかりける梅風の音のすむかたにさわく松の嵐の

八

物名

さくらをよめる　和泉式部

ちる桜よかれそめんやまのまにむらさきの雲とみゆるはまつら

すゑのさし　中納言定頼

源ゆかりてちるも年ふるもかをしめてをしはをしとかく朝露をさらん

かきつはたのうら　大弐三位

撫子は葉をしけれとも袖ぬれのしけきたえぬかなしき

池にすむおしのけさわたるいかに雨もさかさ

二条太皇太后宮肥後

うつろや

わか駒をとめてやすらふやまのはのこすれはるかにいそく

源俊頼朝臣

ほとゝきすやまて

見る山吹の花さくかたに民さかしと思ふ

かくしのみのかれ

ちるくものまよひにまかるとも秋のかせふく風の音さへ

[illegible]　刑部卿頼輔母

[illegible]

百首哥よませ給ける時花乃哥

[illegible]　待賢門院堀川

[illegible]

[illegible]　備教有家

[illegible]

[illegible]　寂蓮法師

[illegible]

[illegible]

花乃[illegible]　道命法師

あやしくも花のあたりに[illegible]

卯花をよめる　源俊頼朝臣

卯[illegible]

五月五日菖蒲をよめる　道因法師

[illegible]

[illegible]めせけるや　橘俊綱朝臣

[illegible]

みか月の毎日くらくこそとハ風吹ともさえゆる

江侍従

夜の月ハたゝさえわたるもあかさくおもハさらぬ空風吹ぬ

影しらす　輔仁親王

梅花の秋の色も花も見てすゝみなかぬ身を何よけらん

萩か露の玉とも見ゆるをわかるれども露ちる

かわきわくよめる

藤原為頼朝臣

羽露とかけあさてみをきハちゐ萩の上露ゑやとまる

崇徳院上百首哥奉りける時萩の哥とて

よめる

花園左大臣家小大進

ふえみすくとすゝ芝生の露をぬらしてもたれもかな

野花を見てく道よこらくにいつらんとよ

よめる

備前親云

露やさと行くハ風の前もと見し花の陰やとる

九月十三夜によめる　覚蔵法師

曇乃根とほきや菊さ月秋十夜よあすよわれて

将我同他者もとへつら秋よめる

源昭法師

梅ひらきすや庭の村雨もれ露ふき世ぬ露

堀川院乃御時百首風ゟ奉りとてよめる

藤原基俊
諸行乃わか身を浅まし此世ゟやかれやかれさらわかならし
猿丸　源俊頼朝臣
さてひとつ恋乃やつこに旅まてとあれかく世かまゝや名ら京
百首よ前まわきてらよ恋乃前とこれよあら
待賢門院堀川
逢事乃ゆめまた乃いとこらさきとおもへ今のこのあふまて
六波羅蜜寺乃講の舞師よりて雪ま所よ乃
われ秘よ能子の女房わしと語くて給ふ宣れ
まうく
良暹法師

今更逢ことほとしよりて忘わぬよる青梅はおいをともと思ひなほ
山寺よこそわれて係る時そあるみとも成給
くつそしゆきれしのみくつらしそら
寂蓮法師
おそろやきさ風きら乃花橋やまたみあひよ落さ
賀茂社よことわて給ききらは政事つふ
まうくきて前よ見御吹おとしくわれいそら
第こえなほつのよことよあるめる今とする
爲そ例こ今とさかわ前もそろな今あるく
始めつくまうみくことわきれつらくける

心覚法師

箭弗れたらて何ぞ思ひはなし嫌生る後にまされるは

あつき風ふくまゝかゝるにやなんしれかも

道因法師

八ろ破れ后之に海らかまてに行へる方を思ふに

血とるゐは何さらとはふに見まし三年る

見おもひぬえ○こつくいく何ぞれいふなる

安性法師

浮らきれいとも我山寺の涙に海にもし

一つゝとの小児の文字を新に〓〓十首

しもえ何ぞつまれしくふのに何に来て

源俊頼朝臣

加みのとくるの文字は海に風ふ風の計も間にも眺めかや

山寺に海うへ雨のまる村貝吹ら宇

〓〓るよのなら

赤染衛門

まよひ文字風貝しる海まつ風来乃つ雨に選んかける

野しらず

空也上人

極楽をひまほりかう[illegible]にてとつとめて[illegible]

千載和歌集巻第十九

釈教歌

維摩経十喩に此身水の泡のことしといへる心を
よみ侍ける　前大納言公任

こゝにきえかしこにむすふ水の泡のうき世にめくる身にこそ有けれ

うき雲のことしといへる心を

定なき身はうき雲によそへつゝはてはそれにそなりはてぬへき

三界唯一心と歌よませ給けるに

花山院御製

世間はみな仏なりおしなへていつれの物とわくそはかなき

法花経薬草喩品の心をよみ侍ける

僧都源信

大空の雨はわきてもそゝかねとうるふ草木はをのかしなしな

菩提といふ寺に結縁の講しける時聴聞にまいりて
まうてくるに人のもとよりとくかへりねといひ
いひつかはしけれはかへりことに

清少納言

求めてもかゝる蓮の露をおきてうき世に又はかへる物かは

後冷泉院御時皇后宮にて一品経供養せ
られける時寿量品の心をよみ侍ける

藤原隆房

月影のてらすにしもあらはれて我湯ら雲にかくれましやは

寄月念極楽といへる心をよみ侍ける

中院入道右大臣

入かたをみて思ひしるしをそへて西へ行らん月をこそ思へ

天王寺にまいりて舎利をおかみ奉てこれをつかはしてよみ侍ける

瞻西上人

薪つき煙もすみし空よりもこれやなこりとみるそかなしき

ゆるしけれはまかりてかきたる精進の後金泥の法花経書奉て横川山におさめ奉るとて

まつりける時思ふことや侍りけむよみ侍ける

家集に侍る　前参議教長

寝さめしてその暁をまつ程のやみをもてらせ法のともし火

かくてまかりて侍くはれ山まておもしろきに

けるみのくらしまこし山奇究みてよみ侍りける

三十三所観音おかみ奉らんとてところ／＼まいり侍りける時みのゝ谷汲にて油の出るをみてよみ侍りける

前大僧正覚忠

世を照す仏のしるしありけれはまたともし火も消えぬなりけり

何事との観音[illegible]見えまいらせてよめる

ちかひには海を渡りて法のため命をすつることをおしまし

摂政太政大臣 備教究竟

ちよまでもいのちをすてゝわかために思ひやるにも

陀羅尼品乃受持法花名者福不可量何

況擁護具足受持といふ心をよみて持

経者の結縁ふかきそのちかひやゆきゝにみなゆきて

前大僧正慈鎮

われくそ名をもしらぬるものゝ法の花にあとをつくらぬ

阿弥陀乃十二光佛の名をよみ侍ける中に

無邊光佛といふ心を

源俊頼朝臣

佛乃ひかりはきはもなきものをみな照らしてそ光なかりき

百首哥よみ侍りける時普門品弘誓深如海の心を

よみ侍りける　崇徳院御製

ちかひをはちひろのうみにたとふなりつゆもたのまは数に入なむ

おなし百首哥の中に花厳経乃心をよみて

前参議教長

あらはさぬみ佛と思ふ心こそ身つからわれとさとりなれ

即身成佛の心を

照月の心の水にすみぬれはやかて此身に光をそさす

法花経信解品の心をよみ侍ける
前大僧正覚忠
ゆめのうちに今そよろこふ梅月来風をも海ともいはしもかなしみにてはしけ
名乃しら後入道法親王家に五十首哥よまれ侍けるに遠のこゝろを
侍けるに述懐　崇徳院御製
諸雲は若の光かくさとてしとて二世の仏の日や照らす覧
内の事　仁和寺後入道法親王覚性
照らさるる二世の仏の日もうら也とも照らさるゝ
百首哥の中に法文の哥の中に普賢勧発
唯此経王不相捨離といふ心を

式子内親王
古郷をひとりわかるる夕にもをくるは月の影とこそきけ
百首哥よませ侍ける時法文の哥に十楽の
心をよみ侍けるに聖衆来迎楽の心をよみ侍る
摂政前右大臣
今よりハ苦の海ともいひさしきまへハおもひしよりあを
維摩経十喩此身如水中月といふ心を
よみける
宮内卿永範
心すみ海にはなれてとゝろ定めなき世のやみにまよへる月影
比叡乃山に堂衆学徒不和の事出来て

学侶皆ちかき時ゟ日乃山こもりみちける事
恵ちかく此世の絶をもみえ人事を観しけれ
さりて山洞にこもりて修行し侍りしに感に
名れは雷ゆるかせ給に蓮因法師か折ふし
つゐにしるす　法印慈円
修しく菩薩の絶や絶えしと思ひしをしる雷
驚一　蓮因法師
君か為歌ゆるし無量雷もれ絶ゆふとも猶なをし
法花経中了宗因秘葉薩行也えもえもみえ修
きりう　左近中将良経

継のことし花海ときとめ波とも庭とものにゝ人かゆ世
摂政前右大臣家に百首歌よませ侍りし時
法文乃歌の中に般若経乃心をよめる
藤原隆信朝臣
其行れもいりてものこゝの三世乃佛乃母とよりては
おほしき百首の時色即是空と即是色を
色歌によめる
摂政家丹後
むかしきをも色なるものこゝそ花や春乃こゝろ風とわかるらん
法花経我等長夜修習空法乃心をよめる
前中納言師仲

みちよ秋とむすひし池の光をもやへたるみかみられ
壽量品乃心をよみて
圓位法師
鷲乃山月を入ぬと見る人はくらきにまよふ心なりけり
瞻西上人雲居寺にて極楽堂の堀池にて大会の日
いはく前と見ゆ人給ふらむとよめる
神祇伯顕仲
つきもせぬ池に影うつるひかりもや千世を思ふらむ
大木殿乃常燈燃れるをよめる
寂超法師

掲さつ神にこそつけしひかりもさかゆる法のあぶら
維摩経十喩此身ハ夢のことしといふこゝろを
よめる
前参議資隆朝臣
見るほとハ夢を夢とも志られねはうつゝとしこそ思ひしか
登蓮法師
鷲のみねにゆかむとおもふかひもなく花のちる世を夢とみるかな
高野にまかりてよみ侍ける
寂蓮法師
暁を高野乃山にまつ程や苔乃したにも有明の月
煩悩即菩提の心をよめる

式子内親王家中将
思ひくだくる心つよ蔵の花にこそ氷と水とへだてさゝやき
観音のちかひを思ひてよみ侍る
藤大納言時忠
夜嵐にちらのひとはよりわかれし枝も枝も修せる
法花経序品の心をよめる
藤原伊綱
春ごとに親しむ池と法の庭ちかきにかゝる花も絶らむ
文殊品の心をよめる　右京大夫季能
見る人のこゝろみなほるをみもかし梅も月も見えし光なるらん

法師品漸見湿土泥決定知近水の心を
よみ侍る　皇太后宮大夫俊成
むさしのゝほりかねの井もあるものをうれしく水のちかづきにける
提婆品をよめる　顕昭法師
谷水をむすびてつかへし新のうちに子をせしを逢ぞうれしき
勧持品をよめる　法橋泰覚
捨てゝこそあやうくみえし世をすてゝ板田の橋もわたりぬるかな
藤原敦仲
くらきよりくらきにまよふ身なりともてらさゞらめや照す月影
神力品如日月光明能除諸幽冥の心を

よみ人
蓮上法師

日の光月の影とそ照しけるくらき心のやみはれよとて

勧発品の心をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

ちりしきし花を清しるしなる山法乃むしろにゐるかな

満三七日已来六牙白象の心をよめる

中原有安

おろかなる我をもすてぬ誓ひこそ川のみなかみ宮のうち府

雪山偈の心を　中原清重

鶴のはやしの法のなかにそあるへかりける身をすてゝ

山階寺乃涅槃会の事をかたるを聞て遠く入滅の

事を思ひやり侍りける　恵章法師

いにしへの月乃雲かくれせしよはのそらこそおもひやらるれ

涅槃経如於鏡中見諸色像乃心をよめる

俊寿法師

澄くまし心のかゝみにみえぬらんやかてそうつるかけならぬかな

火盛久不燃といふ心をよめる

寂然法師

燃えまさる火の宅鳥も遁れ出てち別かおもひにみをこかさ

阿弥陀経乃心をよめる

平康頼

鳥の音も浪の音にそかよふなる同し御法をときけはなりけり

天王寺の法華の時百首寺とていへる歌よめる

藤原定長朝臣

世をすくふ誓ひのしるしにあひにけりしめたくましき時を思ひそ

天王寺にまかりて遺身舎利を礼してよめる

天台座主明雲

法のため身をすてし人の舎利にこそ残るかたみのあとはとゝめれ

往生講式をよみ侍ける時教化の哥読侍ける

律師永観

みな人を渡さむと思ふ心こそ極楽へ行くしるへなりけれ

千載和歌集巻第二十

神祇哥

後一条院の御時はしめて春日社に行幸ありける

そのかみ一条院の御時の例とおもひ出て

させのふくらせ給ひける

上東門院

三笠山さしてきにけりいそのかみ古き御幸のあとをたつねて

長元八年関白左大臣哥合し侍ける

たか祝の心をよみ侍ける夜の神あそひをよみ侍ける

侍るよしの神のみかくれにける

大納言経輔

住よしの浪もこゝろをよせてけむ河よりもたちかへるかな

白河法皇熊野へまうでゝ世のまつりごとをはじめ侍
りけるとしやはたまうでのおほくなりて読侍ける

ゆきかよふみちもかはらず

続二条内大臣

思ふことみなつきぬとて神がきに祈るしるしは君ぞ
かへらん

百首歌めしける時神祇歌とてよませ給ける

崇徳院御製

道の辺のたゝすみかはの光をやかけて神も御代をまもるらん

藤原清輔朝臣

君が代のためしにや柿本をきて(?)山にさかえん
時もあらん

中納言家成侍りしとき海にてよみ侍ける

大納言隆季

神代よりつもれる浦に家ありて経ぬと見しを風浪に誤

大納言辞申て出仕侍らぬ時住吉社
の歌合とて人々よみ侍けるに述懐の歌とて
よみ侍ける

右大臣

かぞふれば八十の世経てけふまでわたる浪にのぞみ(?)よ
きのふ神祇あらたにかけて大納言

云ゐは遠くなりにけるかな

おなし歌合に　皇太后宮大夫俊成

徒にかゝみあまきとも俊成の声はしらねとも社頭月といへる心をよみ侍りける

杉本にて歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける

右大臣

神かきや松の梢にさしそへて遥かにすめる月のかけかな

俊恵法師

隠岩の雲のうへにもかゝやく月は神の袖にや霜をおきける

賀茂両社の歌合とて人々よみ侍りける時

社頭雪といへる心をよみ侍りける

権大納言実国

ときはなる松に雲ゐの月すみてなかき御代をも神やまもらむ

有馬の湯のことを思ひてすゝめ侍りける法師の侍るを、湯の明神は三輪の明神と申すと聞きて神のみに付けて侍りける

按察使資賢

めくりくる年をも三輪の神なれは湯の湯のわくそしるしなりける

熊野へまゐりて侍りける時参籠の間のまうて

めくみ見え侍りける

権中納言経房

うれしくも神のちかひをしるへにて心をおこすすゝめけるかな

三輪の社にて霧をよめる

僧都範玄

榊葉も霧にこもれる三輪の山神の杉むらいつ分けいらむ

荒人の今かみのねぎと跳ねかまへて御まもりかくる賀茂社

みまへにて御かうまゐるを二千三百度ばかりしわきまゐ

らる時貴布禰の社にゐてつくしくゝ難きかなと

つかまつる　　平実重

今までにかくなかりしうき世をも神の御かげぞくらく(?)神をも頼み

かくて猶わがわたりける荒人の今かみのまもりにまかせ侍るかな

崇徳院にめされける時なり

片思ひのこゝろはなくもくちまさる(?)ともかひ社の杜

宣ふともこれに中きるゝ跡とて(?)くゐにもつゝまむ

つゐきる　　賀茂政平

さわともとるなみこそかくる中宮子に片思ふ神の(?)ゐて

その猶ならむ杜宣ふとかわ成りきる

百首歌中に神祇乃歌とてよみ侍ける

式子内親王

ありとしもなのしるし神さびて八十氏(?)ならむ(?)ぬかけ(?)いく

賀茂社の歌合とて人々よみ侍ける

時述懐の歌よみ侍る

賀茂成保

貴ふね乃歌とて人々よみ侍りける保延のころほひ神祇
おほかもの社の歌合の時月の歌とて
よめる　　皇太后宮大夫俊成

貴布禰川玉ちる瀬々の岩波に氷をくたく秋の夜の月

述懐歌中によみ侍りける　　法印慈円

我たのむ日吉乃影ハ奥山乃柴乃戸まてもさゝさらめやは

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける

法橋性憲

[illegible]

日吉乃社に詣侍りける時霰のいたくふりけれはよみ侍りける

中原師尚

さかき葉の[illegible]根のかつらに雲[illegible]日吉[illegible]

高野の山を住うかれて後伊勢の国二見の浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をは神路山と申す大日如来の垂跡を思ひてよみ侍りける

円位法師

深く入て神路乃奥をたつぬれは又うへもなき峰の松風

国立公文書館 National Archives of Japan

治承四年遷都の時伊勢太神宮よりまゐ
りて君乃ために祈念し侍りけるによみ侍ける

大中臣為定朝臣

月よみの神しまさはわかまよふ雲はらひ世をも照らせ
うつろふ世の中をあまてるかみのめくみあらはせ

石清水の社にて哥合し侍けるに人々によみ侍ける
神祇といへる心をよめる

能蓮法師

いはし水すゑまて風の跡をあふけハやとる月のかけそあきらか

長元九年後朱雀院乃御時大嘗会主基

方乃神あそひの哥丹波国神なひの山をよ
める

藤原義忠朝臣

ちはやふる神なひ山の榊葉ハさかえてそへむ萬世まてに

治暦四年後三条院の御時大嘗会主基

方神あそひの哥いつゝ山をよめる

藤原経衡

うこきなき代をもちきるかやつ山の榊葉の色もかはらて

寛治元年堀河院乃御時大嘗会悠紀

方神あそひの哥近江神郷をよめる

前中納言匡房

いかにしての神代もけふもかはらぬは豊のあかりの世をかさぬらむ

久寿二年院乃内時大嘗会悠紀方風俗
哥近江国木綿園をよめる
宮内卿永範

神ところゆふかけわたすひもかゝみ祝ひつもれる悠紀のにはかな

嘉応元年高倉院内時大嘗会悠紀方よ
神あそひの哥近江国守山をよめる

すへらきの千代をまもらむ代の神もまもるらし山のみねの松

寿永元年大嘗会主基方風俗哥
まれらの時神あそひの哥丹波国神なりいへる

よめる
権中納言兼光

天の川かはらにたてる神なひの山の榊をかさしにそする

元暦元年今上御時大嘗会悠紀方哥
神あそひの哥近江国清水神楽
とよめる
藤原季経朝臣

図書局文庫

あさ日さす長田の小田のしき浪に千代もかはらぬすみれのみどり

おなし大嘗会の主基方哥ならみ
る神あそひの哥丹波国千年山をよめる
藤原光範朝臣

ちとせ山神乃代よりせむ榊葉のはなさかさくさかえあるかな

[illegible seal]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤井一[illegible]

これ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan